

いつも手を差し伸べてくれた先生たち。



大谷中学・高等学校を卒業した先輩たちが学生時代を振り返りながら、ここで得た気づきや現在の自分に息づくもの、未来へのヒントについて語るインタビュー企画。

第二回は、彌榮自動車のタクシードライバーとして、京都を訪れる国内外のお客さまやVIPを案内する山崎夏子さん。英語とスペイン語を習得し、世界中どこへでも出かけていく行動力を持つ山崎さんですが、学生時代は不登校の時期があり、挫折も多かったとか。前編では、そんな自分を救ってくれた先生との思い出をお話いただきました。

葛藤を抱えていた学生時代



——山崎さんは高校時代、生徒会長をされていたそうですね。

山崎夏子(以下、山崎): はい。高校2年のとき、前期の生徒会長をしていました。でも、そのすぐ後から高3の半ばまで学校へは来たり来なかったりで、実は中3のときもほぼ学校へ行っていないんです。だから、今回のインタビューは本当に私で大丈夫だったのかなと思って(笑)。

——そうだったんですね。学校へ来ない時期があったかと思えば、生徒会長を務めた時期もあり。振り返ってみて、自分はどんな学生だったと思いますか？

山崎:ティーンエイジャー特有の悩みを抱える時間が、少し長かったんだと思います。昔から何でも完璧にしたいという気持ちが強くて、何かうまくいかないことがあったとき、そういう性格の一部が邪魔をしていたんでしょうね。「こうじゃないとあかん」という思い込みが強くて、それはお父ちゃんからもいつも指摘されていました。でも、当時の私はなかなかそれを受け入れられなかったんだと思います。

——「お父ちゃん」というのは、乾文雄校長のことだそうですね。

山崎:はい(笑)。高1のときの担任の先生で、今でもそう呼んでいます。



「お父ちゃん」と呼ぶ乾校長と山崎さん。今でも悩みがあれば相談できる親子のような関係が続いている。

——そのときは、乾先生とどんな話をされていたんですか？

山崎：私、母との衝突が激しかったんですよ。ちょうど中学へ入学した12、13歳くらいの頃は思春期の真っ只中で、母としょっちゅう喧嘩をしていました。家庭の問題を抱えながら中学3年生のときに完全に不登校になってしまって、通信制の高校へ行く話が出たりもしましたが、中3の担任だった大橋先生から「インテグラルコースでもいいならそっちへ来たらいい」と言われて、インテグラルの方へ進級したんです。大谷の中学校に通っている生徒はみんなバタビアコースに進むのに、自分だけインテグラルへ行ったことで新しく友達を作るのにも時間がかかったし、相変わらず家庭の問題も抱えていて、そんなことをよく相談に乗ってもらっていました。

乾先生は、直接的に「こうなさい、ああなさい」と言うのではなく、「これができたね、きっとあれもできるよ」と、褒める方向で話をしてくれるので、そこですごく気持ちが楽になったというか。それまで「こうならないといけない」と思い込んでいたプレッシャーから、少し解放されたんだと思います。父がいない家庭だったこともあり、余計に私にとっては「ええお父ちゃん」だったんです。

必ず手を差し伸べてくれる存在。



今でも数年に一度は学校へ遊びに来るという山崎さん。先生も口を揃えて「大谷の卒業生はよく帰ってきてくれる」と話す。

——そんなふうに呼べる恩師に出会えたのは、すごいことですね。

山崎：私は大谷に入って本当にラッキーだったと思います。元々別の中学へ行くつもりで受験していたのですが、そこは受からなくて。だから大谷に入ったと言うと聞こえが悪いかもしれませんが、「あかんかったから良かった」ということはあるので。

——いつ頃そう思えたんですか？

山崎：入ってすぐにそう思いました。大谷のアットホームな雰囲気は自分には合っていたんだと思います。せっかく高校でまた学校へ行き始めたのに、以前の“完璧じゃないとだめ”という意識が戻ってきて、高2の2学期からまた学校に行かなくなってしまったんですけどね。でも、そこで声をかけてくれたのが、特別活動を担当していた田村先生でした。

——いつも誰かが見ているんですね。

山崎：それが大谷のすごいところで。一時は高校を卒業するのも難しいかもしれないと思っていましたが、大学入試を受けられる状態まで先生が根気強くサポートしてくださいました。あのとき、田村先生が声をかけられなかったら中間や期末のテストも受けに来れなかっただろうし、大学には行けていなかったと思います。何かあるたびに必ず誰かが手を差し伸べてくれたことは、学生の私にとってすごく大きな助けでした。



<PROFILE>

山崎夏子 **Natsuko Yamazaki**

京都府生まれ。大谷中学校、大谷高等学校を卒業し、2014 年京都産業大学文化学部国際文化学科を卒業。彌榮自動車株式会社に新卒ドライバーとして入社し、現在はジャンボ・ハイヤーの運転手として、国内外の観光客や VIP を案内する業務を担当している。

Interview & Text: Asako Saimura

Photo: Ayumi Yamamoto